

ニュース

【令和3年9月以降の稽古について】

長崎県でも、まん延防止等重点措置がされ、各施設の使用禁止等、活動が大きく制限されています。このような状況ですので、9月の稽古も引き続きお休みとさせていただきます。稽古再開を楽しみにしている皆様には申し訳ありません。

会員投稿

吉田さんからの投稿です

コロナ禍の中、東京オリンピック、パラリンピックが開催されました。パラリンピックの選手たちは本当にすごいですね。体のハンディキャップをものともせず、最高のパフォーマンスをみせています。絶対、自分より身体能力は高いです。比べること自体が間違いですかね。車椅子を使った競技にバスケットやテニスなどがありますが、車椅子で合気武道をやっている人がいるのをご存じでしょうか。合気道ではなく、「大東流合気柔術」の人です。2002年11月にA I K I (アイキ) という映画(天願大介監督)が公開されました。主人公のモデルは、脊髄損傷で車椅子生活になったが、車椅子のまま大東流合気柔術を修業するデンマークのオーレ・キングストン・イェンセンさんです。この映画は「秘伝」という雑誌の記事がきっかけで作られたそうです(映画化に10年かけています) 主人公の師匠のモデルは、オーレさんが所属する大東流相木柔術六方会の岡本正剛宗師です。主人公を加藤晴彦さんが演じ、障がいの苦悩や合気柔術の魅力をよく画いていると評価されています。師匠の役を演じた石橋 凌さんは、六方で稽古して、岡本宗師の細かなところまでよく観察して演じており、この映画で報知映画賞助演男優賞などを受賞しています。この映画は、地元新聞社主催の試写会に応募して観に行きました。主人公を当時の人気アイドルが演じていたためか試写会には若い女性も多かったようです。他にも、福祉関係?と思われる中年の男女のペア、そして武道をやっているようなおじさん達もいて、バラエティーにとんだ人々が集ったようで、意外と関心をもたれているものだと感心しました。ちなみに他道場の知り合いも来ていて、考えることは同じだなと笑いあいました。自分としては、車椅子での武術という点に興味があったのですが、障がいを負った人たちの苦悩や苦勞について知ったことも多くあり、勉強になりました。映画の前半は、交通事故で障がい者となった主人公の苦悩や周囲の人々との関わりについての話で、後半からは合気柔術との出会いと成長といった内容です。前半の苦しみがあるので、後半での主人公の成長がより感動を与えるのだと思います。また、師匠の演技も大変よく、本当に魅力ある指導者で、見習うことが多くありました。あれから20年近くが過ぎ、自分も指導する側になり、障がいを負った人の指導がどんなに大変なことかは想像できます。自分に指導ができるかは心もとないところです。今の自分に何ができるのか、これから何ができるようになれるかについて考えていきたいですね。

編集後記

稽古ができない期間が長くなり、合気道を忘れてしまうのではないかと不安になることもあります。しかし、再開したらすぐに思い出すでしょう。今は我慢の時、耐えるのも稽古のうちでしょう。皆さんも健康に気をつけて再び会える日を楽しみに待ちましょう。